

アメリカの養鶏事情と日本養鶏の進路

3月12日岡山市乃木服講堂で、県主催、養鶏団体後援のもとに養鶏講演会が開催された。当日は午前10時から井原市の山下次郎氏による「私の経営する高度自給養鶏」の体験発表があり、引続いて12時から農林省農業技術研究所（千葉市矢作町）の森本宏技官による「アメリカの養鶏事業と日本養鶏の進路」についての講演があり、聴衆200名に多大の感めいを与えた。森本氏の講演要旨は大要次のとおり。

アメリカに行って先ず驚くことはすべてが、近代に機械化されているという事で科学的、学術的な面が重要視されている。反面日本の技術面においてはどうかという事決してこれはアメリカにおとつてはいない。むしろ立派なものだといいたいが、日本は残念ながら組織力が弱い。

アメリカの鶏数は卵鶏が4億5,000万羽で、アメリカの特長としてブロイラーといい肉を専門にする所謂食肉鶏が9億いる。（日本の全飼育鶏羽数は約5,500万羽）

10年前は1億7,000羽位しかいなかったが最近急激に増えて来ている養鶏は直接飼料の生産地と結びついており、トウモロコシの多い地方のテキサス、カルフォルニア、アイオワ等が盛んである。飼料は断然配合飼料が多く、アメリカ畜産の飼料は1億4,000万トンで2,000万トンが配合飼料でその6割が鶏の飼料であり、この配合飼料を使った結果は生まれて8週間目の鶏について言うと1926年では目方が1.6ポンド（200匁）、36年1.9ポンド、46年2.2ポンド、54年2.8ポンドと26年に比べ2倍に成っている。これは配合飼料の良さを示すもので、最近では抗生物質、ビタミン類の研究発展のためといわれている。又目につくことは数を無闇にふやすのではなく産卵率等を進歩さすという事が重点で、広い土地

が必要であるという感じがしない。せまい所で多く飼育し、しかも10週間で大きくし、1年に4回育雛するというブロイラーの生産に力を入れており、育雛の欠点は科学飼料によって除かれている。

抗生物質の価値

アメリカの養鶏は最近著しい発展をとげているように思う。特に、最近10カ年間に急速な発展をしたブロイラー（肉用若鶏の育成）工業ではこの感が深いように考える。

これらの著しい発展の原因は養鶏飼料の著しい進歩によるもので、特にブロイラー工業は飼料進歩の影響を最も大きく受けて発展したものとみなされている。従来考えられた蛋白質、無機物などのほかにビタミンその他の微量物質の飼料への応用、さらに数年前に発見された抗生物質の養鶏飼料への活用などが考えられる。

最近では、その効果は広く認識され、特に雛の成長促進については、その著しい効果を疑う者はない現況で、これを利用することは常識となっている。このような見地からブロイラーをつくる場合にも一般の雛に抗生物質が大きく貢献しており、抗生物質添加剤の重要性は一段と大きくなっている。また最近では鶏の特殊な病気の予防及び治療の目的で、抗生物質添加剤を高度に飼料中に混入され、このほか種鶏、採卵鶏に対する抗生物質の効果は未だ広くは確認されていないが、一部にはこの種の鶏に対する効果を認め、飼料中に抗生物質添加剤を混入している場合も少くない。